

明治の「煩悶青年」たち

一 「煩悶青年」とは何か

(一) 煩悶の萌芽

「煩悶青年」——現在では聞き慣れないこの呼称は、明治三十年代から大正時代にかけて、メディアを賑わせた一種の流行語であった。徳富蘇峰は、大正五年に著した書『大正の青年と帝国の前途』の中で、当時の青年たちを、「模範青年」「成功青年」「煩悶青年」「耽溺青年」「無色青年」といったいくつかのパターンに分類している。ここで、「社会を掃しつゝ、ある成功熱に反抗し、若しくは其熱に取り残され、其他種々の理由よりして、世を不可とし、而して此の不可なる世を、如何に渡る可きかに当惑する」者だと定義されているのが、「煩悶青年」なのである。日本近代文学における女性の表象について論じるのが本来の論者の目的であるが、その際、まず考えなければならないことは、この時代に起こった青年の考え方の変化なのではないかと思うに到った。そこで、本稿では、明治の「煩悶青年」について考えてみたい。

「煩悶」は文字通り「わずらいもだえること。もだえ苦しむこと（広辞苑）」の意だが、現在の日本語においては、「懊惱」とそれほど区別なく使われているようである。先にひいた広辞苑には「懊惱」の意として「なや

みもだえること。また、そのさま」とあるし、辞書によっては、「煩悶」の項に「懊惱」とある場合もある。しかしながら、もともとの中国語において、両者はやや異なった意味を持つてゐるようである。「懊惱」はやや公的なニュアンスを持つ言葉なのに対して、「煩悶」はより私的だといふのである。例えば、「我現在心理恨煩悶」とはいつても、これを「懊惱」に変えることはない、という。「史記」や「三國志」では「煩懣」といふ表現が用いられており、白居易の「題新昌所居詩」には「宅小人煩悶、泥深馬鈍頑」というくだりがある。このように、そもそも「煩悶」といふ言葉が内面的な苦悩をあらわすものであつたといふことは、おさえておくべきポイントだろう。

さて、明治になつてから、この「煩悶」といふ漢語を好んで用いたのは、国木田独歩や高山樗牛であつた。独歩が「煩悶」といふ言葉を使い始めるのは、明治二十六年頃である。彼は、明治二十六年三月十六日に、『欺かざるの記』にこのような記述をしている。

▽父母、故郷に吾の立身出世、乃ち社会的富貴光榮を祈りて待つ。之れ「吾」なる伝記に取りて如何に大なる事實ぞ。此の事實は吾に如何なる煩悶苦痛を与えるぞ、然れど吾学び得たり、父母を案ずるには至情至愛あり。…(三月十六日)²⁾

ここでは特に、使われる語が「煩悶」でなければならぬ必然性はないようにも見える。しかし、ここに見られる、立身出世を願う父母と、立身とは違ふ道に進むことを決意する息子との価値観の乖離は、「煩悶青年」の大きなバックグラウンドである。独歩は明治二十六年に既にこの問題について考へていたが、社会や文学の中でこれが問題となるのは、主に日露戦争後のことであつた。

十七日には、独歩はまた、「△歸路幽愁憂思、煩悶悲哀措く能はず、天を仰て吡嘆止む能はず、吾の力足らず、吾の天才の吾が希望にそぐはざるを覚え、吾の極めて脆弱にして為すに足らざるを慨嘆して嗚咽す。」と記し

ている。そして、このような「煩悶」を抱えていたのが彼一人ではなかったことも、続いて述べられている。

今朝今井忠治氏の書状来る、一少壮者と社會生活」の一材料たる可し、彼れ曰く僕は漸く煩悶の氣に動かさる、是に於て僕は感謝す、幸にも此煩悶出來りたることを云々、少壯、——理想——社會——煩悶——ア、其の後は如何、一年の後は如何、十年の後は如何、二十年の後の彼は如何、抑も吾自らは如何。吾答書す、中に曰く、煩悶は心靈の鼓動也、良心の刺戟也、人間秘密の音楽也、人若し之を御すに健猛なる意志の力を以てし、精勵苦闘せば精神上、一段の進歩を見ん云々。

今井忠治とは、独歩の山口中学以来の親友で、『暴風』の主人公ともされている人物である。そしてここでは既に、「煩悶」は特別な言葉となつてゐる。この文章を見ると、独歩と今井の兩人が、「煩悶」を苦痛と捉えながらも、一種の特権とみなしていることがわかる。これは社会と相容れることのできない若者の苦悩であり、しかも、「心靈の鼓動」「良心の刺戟」「人間秘密の音楽」と独歩が形容するように、誰しもが感じられるものでもない。鋭敏なる感性を備えた者だけが、「煩悶」することができるのである。親の世代との価値観の相違を感じている明治の若者は、「煩悶」することによって自分たちの新しさを確認しているのである。

それでは、彼らはどこに「煩悶」のモデルを見出してゐたのだろうか。それは、次の文章から伺い知ることができる。

吾人は深刻を愛す、故に此の小説を愛す。吾人は痛烈を好む、故に此の小説を好む。人間必ず罪あり。人は罪なくして生くる能はず。罪あり、其こに煩悶あり。煩悶は苦痛なり。苦痛若し罰ならんか、煩悶則ち罰にあらずして何ぞ。煩悶は則ち、毒血、靈を染むるなり、心靈、焰火に焦ぐるなり。破れて苦叫となる。此小説は此の苦叫を冷然として解剖したる者なり。故に生割奇創、匂々鮮血滴る。

これは、独歩が担当した『青年文学』という雑誌の書評欄である。この頃から同誌に寄稿するようになっていた彼は、二十六年一月に、ホーソン『用達会社』（森田思軒訳）とドストエフスキー『罪と罰』（内田魯庵訳）の書評を書いている。先にひいたのは、『罪と罰』評の冒頭の部分である。魯庵が『罪と罰』巻の一を刊行したのは、明治二十五年十一月のことだった。翌年二月に、巻の二が出て、中絶している。『青年文学』の書評を書いた時点では、独歩は第一巻しか読んでいないわけだが、彼は明治二十六年の三月の『欺かざるの記』にも『罪と罰』を読んだことを記しているから、二巻とも読んだのだろう。この魯庵訳は、世評は高かったものの、あまり売れなかつたらしい。魯庵自身は、後に「翻訳が拙いから歓迎されはしなかつた。中には歓迎して呉れた人もあつたが、一般公衆からは認められなかつたのである。言ひ換へれば、当時の読書界には、ドストエフスキーは余りに早過ぎたのである。」と述べているが、この翻訳を歓迎した一人が独歩だったというわけである。そして独歩は、この小説を評するにあたって、「煩悶」という言葉を用いた。因みに、魯庵の訳文の中では、「苦悶」「哀苦」「鬱悶」という表現は登場するが、「煩悶」は見られない。『欺かざるの記』に記されるような彼らの新しい心性は、このようにして、海外の新しい文学——それは、ロシアまで含めた、広い意味での「西洋」文学ということだが——に裏打ちされることになるのである。独歩と、先の今井とのやりとりを見ると、独歩が独自に「煩悶」という表現を使い始めたとは考えにくい。以後の彼の著作において、この「煩悶」という語は重要な位置を占めることとなる。

方、高山樗牛も、早くから「煩悶」していた。明治二十一年のものだとされている樗牛の岩書き、「獨不見」は、幼い頃に別れた後想いを寄せるようになった少女の死を悼んだ小文だが、次のようなくだりがある。

逝けるものは追ふべからず、眠れるものは談るべからず、或は往日の夢を尋ねて僅かに余が煩惱を慰め、或は枕頭恨を呑で寐ね、三更却て愁夢に驚かされしもの其れ幾度ぞや。家人余の懊惱せるを思ひ、其の故を問ふ。答へず、一日密かに香花を携へて少女の墓を弔す。

この文章を見る限り、樗牛は「煩惱」と「懊惱」の語義を、殆ど同じものとして使っているようである。そして、ここではそのいずれもが、私的な悩み、苦しみである。彼の関心は最初から「自己の内面」に向いていたようである。これは、彼が最初に発表した翻訳がゲーテの『若きウェルテルの悩み』（明治二十四年七月―九月）『山形日報』に連載）であったことからわかるだろう。

実際に彼が「煩悶」という語を用い始めたのは、しばらく後のことになる。明治二十八年二月の『帝国文学』第二号に、樗牛は「栗林子の人生観」という論文を発表しているが、ここで彼は、シェークスピアの作品などに比べて近松の作がいかにも「没道義的」であるかを説く。

愛情の爲には吾妻人を殺せり、清十郎も人を殺せり、小かんは母に背けり、忠兵衛は依託金を消費せり、宗七は海賊となれり。而かも作業の應報として見るべきもの、凡て甚だ少く、意志と良心との間に於ける内面的煩悶の如きに至ては極めて希なり。

この文章からは、近松の作品にはない「内面的煩悶」が、シェークスピアの作品にはあるのだ、という主張が見て取れる。樗牛においても、「煩悶」のモデルはシェークスピア作品の中にあつた。そして、彼自身の心情がシェークスピア寄りであり、近松が旧きもの、シェークスピアが新しきもの、としてとらえられていることは自明だろう。そして、以後の樗牛もまた、「煩悶」という語を好んで用いるようになる。同年六月の『哲学雑誌』に寄せた「道徳の理想を論ず」という文章は、「道徳は理想を預想す。凡ての道徳的活動は足理想に到達する為の煩悶の外ならず。」と書き出されている。独歩と樗牛の間には、特に親しい交際はなく、従つて互いに感化しあつたというわけではないようだが、いずれにしても、この二人によって「煩悶」という言葉が、自己の内面を覗き込む苦悩を表わした特別な語として定着していったように思われる。

そして、独歩が明治三十年四月に発表した『叙情詩』の序において、煩悶青年は遂に、「あはれ此混沌たる時

代と、此煩悶せる青年輩と、此新生の詩体とは相関係して何等の果をも結ばず止むべきか。」という声をあげることになる。明治という新時代に、青年たちの精神は「東西の情想、遺傳と教育に山りて激しく戦いつ、」あった。そんな時代の青年の苦悩を最もよく伝えうる詩形は新体詩であるという独歩の主張は、当時の多くの青年たちを共感させ、彼ら自身の苦悶にも「煩悶」という字をあてさせたのである。明治三十七年に、島崎藤村は『藤村詩集』の序に、「また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。」と記しているが、これなどは、独歩の序が及ぼした影響の一端を示しているだろう。

(二)「巖頭之感」の衝撃

巖頭之感

悠々たる哉天壤、遑々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす。ホレーシヨの哲学竟に何等のオーソリチーを償するものぞ。萬有の真相は唯一言にして悉す、曰く「不可解」。我この恨を懷て煩悶終に死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし。始めて知る大なる悲観は大なる樂觀に一致するを。

明治三十六年五月二十二日、一高の学生藤村操はこのような遺書を杉の木に彫り付け、華嚴の滝に飛んだ。この事件が提出したのは、良家の出で、一高の学生であるという、将来の成功を約束された若者が、何故死ななければならなかったかという問題であり、それこそ「不可解」なものとして明治の社会にセンセーションを巻き起こした。¹²そして彼がその遺書で「不可解」の恨を抱きて煩悶し、死を決する」と宣言したことは、『西国立志篇』を愛読して立身出世を目指すものだった青年たちの最も恵まれた一人が、突然「それが何になるんだ。」とその価値観を拒否したことを意味していた。そのため、この自殺は哲学的なものであるとして議論を呼び、¹³当時の世の中が青年たちにとって「煩悶」に満ちたものだという告発だと受け止められたのだ。友人であった魚住折

蘆は、弔辞で「君何が故に遽しくも非凡の天才を千年の水に葬りしや、あ、輕薄の風世に満ち偽を知らざる至誠は君に凝りて姿を潜めしか、君をして時代の煩悶を代表せしめし明治の日本は思想の過渡期に當りて實に高貴なる犠牲を求めぬ。」と述べた。¹⁴ また、事件直後に「少年哲学者を弔す」という文章を『萬朝報』に書いていた黒岩涙香は、六月十三日の数寄屋橋会堂での講演でもこの事件について触れ、「藤村探八時代に殉じたる者なり。彼に罪なし。時代に罪あり。此意味に於て彼をバ得難かる節死者の二に數ふるも不可なかる可きなり」と述べている。

さて、結果としてこの事件は、「煩悶青年」の存在を世の中に知らしめた衝撃的なものとなったのだが、ここでもう一度、何故この事件がこれだけの存在感を發揮したか、この点について見直してみたい。

まず、この事件の持つロマンチックな側面が挙げられるだろう。秀才の美青年が、木の幹に遺書を彫りつけて投瀑死、とは、まるで小説の一頁を読んでいるかのような雰囲気がある。もともと、この事件に限らず、將來ある若者の自殺、というのは伝説と化しやすいのかも知れない。イギリスでは、十八世紀に、トーマス・チャタートンという無名の若者が、やはり自殺することで、躍有名になっている。十歳から詩作を始め、自分の作品が世の中に受け入れられないことと貧困とで、七七〇年、十七歳で毒を仰いだこの少年詩人は、その死を契機に、悪しき時代に殉じた者として美化されることになった。ジョン・フラクスマンは《絶望の杯を仰ぐチャタートン》という彫刻を七五年に発表している。八二年には土産物のハンカチまで登場し、そこには「在りし時代を彩るために生まれしが、高慢と貧困の犠牲になれり」と記してあったという。¹⁶ 実際に彼の自殺を模倣した自殺も多発し、彼の死は十九世紀に入ってから彫刻や絵画のテーマとなったのである。¹⁶ 藤村の場合も同様だった。魚住や涙香と共に「時代の煩悶」、「時代に罪あり」（傍点強調者）と述べているように、藤村も時代の殉教者としてとらえられていた。それ故に、彼の死はまたたく間に追隨者を多く生みだし、¹⁷ 彼が残した「巖頭の感」は「煩悶記」の名で出版されてベストセラーになったのである。¹⁸

しかし、藤村の事件が他のどんな自殺とも異なっていたのは、彼が新しい自死の形を打ち出したからではない

だろうか。日本では、「自死」は勿論罪ではなかった。武士社会の切腹は責任の表われであったり、潔さであったりした。しかし、そこには必ず、誰もが納得する理由が伴われているものだった。ところが、「巖頭之感」を見る限り、そこには「ホレーシヨの哲学竟に何等のオーソリチーを價するものぞ。」という一節と、「不可解」という一語があるだけである。いきなり「ホレーシヨ」という固有名詞が登場しているため、当時はホレーシヨという哲学者が実在していると思われたこともあったようで、この「ホレーシヨの哲学」については面白い挿話も伝わっているが、ここで藤村が「ハムレット」を持ち出していることに注目したい。藤村操は、江戸時代から続く心性としての白死を選んだのではなく、「生きるべきか、死ぬべきか」というハムレットの台詞をなぞった自殺を選んだ。彼の「人生問題」は「西洋の文学」に直結していたのである。藤村は、日光行きに先立って、弟妹に遺書を遺しており、そこには「僕人生問題の解決を得ずして恨を徒らに華嚴に遺すと雖も、卿等を思うの情に至っては多くの人に譲らざるを信ず。今此書を遺して一は卿等が文芸に対する注意を喚び、一は人生に対する真率の研究を促す。」とあるという。藤村自身にとって文芸は人生と切り離すことのできないものだったのだろう。

三宅雪嶺は、最も早い時期に青年の煩悶について記した思想家であった。彼は、明治三十三年頃「慷慨衰へて煩悶興る」という文章で、「悲憤慷慨の代りに煩悶の聲の出では、往きに國家的なりし者の、新たに社會的若くは個人的と為り來りしを證す。」と記している。「国家」を語るものだと考えられていた青年たちが、藤村の事件を契機として「個人」という自己の内部に目を向けるようになったことは、多くの研究者の間で指摘されていることだが、三宅のこの文章からは、操の事件以前にも既にそのような傾向があったことを物語っている。また、同時期に発表した別の論文には、「されど青年に影響を及ぼせるは、米英よりせる決意奮闘の奨励、竝に大陸よりせる懷疑頹廢の傾向なり。」との言もみられる。彼のみるところでは、当時の日本の青年はこの二つのタイプに大別され、前者は「實業雜誌」を、後者は「文学雜誌」を愛読している。前者が、『西国立志篇』さながらの立身出世を夢見る多くの若者であったことは、確認するまでもないだろう。彼はさらに、文学に従事する者は少数ながら、「頭腦の過敏なるあり、言ひ顯はしに鋭くして、稍々性癖を同くする者を刺撃し易いこと、

また懷疑頹廢は事業を志す者の妨害であるが、一部の人達には何よりも面白く、「新時代の新人物の當に趣くべき道程」と考え、社会の状態もこうした文学の趨勢を助長している、と指摘する。ここで彼の脳裏にあったのは、先にひいた榜牛や独歩、さらには北村透谷であつたろう。とはいへ、結局のところ「進歩する社会」においては「自然淘汰」は必ず決意奮闘組を勝利に導く、というのが三宅の論旨であつた。

露佛の文學書類を讀むは宜し、之を嗜好するも宜し。而も之に同化し、人生の解釈を此に求めざる能はざるかに考ふるは、餘りに偏したりとすべし。

本稿が取り組もうとしているのは、まさに「懷疑頹廢」の道に走つた文學青年たちである三宅が指摘した通り、彼らは「懷疑頹廢」が「新時代の新人物の當に趣くべき道程」と考えた。そして彼等は實際に、「露佛の文學書類」に「同化し、人生の解釈を此に求め」ようとしたのである。ここで奇しくも「同化」という言葉が使われていることは、注目に値する。青年たちにとって、西洋文學はまさに、「模倣」の対象、というよりは「同化」の対象だったのである。そして、「文學書類」に「人生の解釈を求め」ようとした最初の例が、「巖頭之感」を残した藤村操だつたと考えられる。このような彼の死が「新しい価値観に殉じた者」という認識を周囲に抱かせ、その結果、神話化されるに到つたことは、島崎藤村が明治三十九年に「緑陰雜話」の中で語る次のような件からも明らかだらう。

文壇の傾向も余程變つて来た様です。露西亞のメレヂコースキーがトルストイとドストエフスキーの作を批評して「新しい悲劇」と云つて居ますが、例へば煩悶を書いてもそれは感情許りでなく智が加わつて居ます。私は仏蘭西や露西亞のが好きで、諸家の傑作と云はれるものを読んで見ますと、情と智とが実によく混和されて居て胸に落ちるのです。羽田の沖で死んだ若い男と女が同情されずに、藤村操が同情されたのも茲

だらうと思ひます。²³

勿論、こうした新しい形の「自死のヒロイズム」に疑問を呈する人物もいた。藤村の事件の後、長谷川天溪は「人生問題の研究と自殺」という文章を『太陽』八月号に発表している。その中で彼は、なぜ藤村の自殺ばかりが、「人生問題の為に死した」ものとして讃美されるのか、「何が故に人生問題の為に自殺するは尊く、何が故に負債のため、或は失戀のため、或は試験落第のため、其の他種々の原因のために自殺せる者は、識者の一瞥を價せざるか」と憤慨し、結局のところ、「人生問題のための自殺」とは自分勝手なものではないかと述べるのである。

轉じて人生問題の為に自殺せる者は、何種を原因とせるものなりやと問はば、予輩敢て言ふ、彼れ等亦個性欲望の満足を得ざるが故に、寂滅を追求したる者に外ならず。即ち彼れ等は個人性發展主義を奉じて失敗せる者なり。

個人性發展主義、即ち所謂本能満足主義は、ロマンチズムが一面の潮流なり。彼れ等一派は、これを以つて人生問題の解答として、個人の本性に随つて幸福を求め、快樂を得むとす。²⁴

ここで述べられていることは、藤村のような自殺が、「ロマンチズム」によるものだという看破なのだが、天溪も、西洋文学から自殺の類型を持つてくる。彼は、「峻厳崇高なる道德的理想の勝利」たる自殺としてオセロの自殺を挙げ、一方で、ウエルテルの自殺については「彼のエルテルは消極的生涯を樂む者の代表者なり。」と手厳しい。しかし、こうやって『オセロ』と『若きウエルテルの悩み』と藤村操を並べることによって、少なくとも藤村がウエルテルであるかのような感覚が、読者には与えられるのではなからうか。ここで天溪は、藤村批判をしながらも、藤村の神話化に一役買っているのである。同様のことは、他でも起こる。大塚保治が『太陽』

九月号で論じる「死と美意識」では、大塚は藤村操の死を、オーストリアの劇作家、フランツ・グリルバルツァーが一八一八年に発表した戯曲「サッフオー」と比較してみせる。

さてサッフオーのことを思ふ毎に必らず聯想に浮んで来るのは近頃華嚴の瀧に身を投げた少年藤村某の話である。否寧ろ藤村の事を考へるとサッフオーを直に想ひ起すといふ方が適當であらう。裏面の事實は分らないが世間に広まつて居る風説によると藤村の運命は不思議にサッフオーの夫に似寄つて居て又面白い対照を具へて居る。²⁵

藤村操の生涯がサッフオーのそれに類似しているというのは、いくらなんでも大雑把な議論だと思ふのだが、ここでも、「サッフオーに似ている」と語られることによつて、藤村の自殺は「新しさ」を付与される。さらにもう一つ例を挙げるならば、夏目漱石の『文学論』の一節、「善悪の抽出」を論じるにあたつての「例へば藤村操氏が身を躍らして華嚴の淵に沈み、又は昔時の *Empedocles* が噴火坑より逆しまに飛び入るが如し。」という挿話は、聴講学生たちを大いに喜ばせたに違いない。ウエルテル、サッフオー、或いはドイツ・ロマン派のフリードリヒ・ヘルダーリンが未完の戯曲「エンペドクレスの死」(一七九九年)を残したことも知られる、前五世紀シチリア生まれの哲学者、エンペドクレスと並べられることによつて、藤村操は段々と崇高な、そして文学的な存在へと変貌する。「藤村の事を詩にしたら必ずサッフオーに似た面白い悲劇が出来るだらう」と大塚は記したが、実際に何度か文学作品のモデルにもなりながら、藤村神話は現在まで語り継がれることとなつたのである。

(三) 煩悶の流行と変質

さて、ともかくも、藤村操の自殺は、個人的なものだった「煩悶」を社会問題のレベルに引き上げ、当時の日本に煩悶の流行を生み出した。一高の六月の進級試験では十七人の落第生が出た。「煩悶・厭世」を理由とした²⁷

自殺者も相次いだ。翌年五月の『平民新聞』は、「學生自殺の流行」という見出しで、浅間山の噴火口に投身自殺した二青年について報道し、「吾人は現時青年の思想の極めて不健全なる者多きを悲しむ」と述べている。やがてこの風潮は女学校をも巻き込み、三十九年になる早々、岡山の山陽女学校生であった松岡千代が服毒自殺した事件は、彼女を「女藤村操」として有名にしたほどであった。華敵の滝でも、藤村の死から五年間の間に、四十人の自殺者と六十七人の自殺未遂者が出たという。

このような「煩悶」流行について、その要因は、家族の伝統的道徳観の崩壊、日露戦争以後の目的喪失状態、近代化の代償としての必然的な反動、というようなところに求められることが多かった。また一方では、それに異を唱え、その原因を「高學歷青年の就職市場の変化」に求めている研究者もいる。実際には、一口に「煩悶」といっても様々なレベルのものが存在していた。このあたりのところを、明治三十九年に雑誌『新公論』が二月にわたって組んだ特集「厭世と煩悶の救済策」を手がかりに考えてみたい。

この特集では、総勢三十三名の各界識者がこの問題について何らかの回答を示している。寄稿者に文学者が少ないこともあり、それぞれの意見はバラエティに富んだもののだが、最も多いのが、「世間一般に全く知らぬ顔をして自殺者などのありたる場合にも新聞にも出さず、評判もせぬが一番」、つまり「マスコミがあまり騒がない」というものだった。これは非常に常識的な判断だが、流行となることによつて、「煩悶」のための「煩悶」が既に生まれてきていることを物語っているだろう。また、意外に多くの支持があるのが、「運動させる」というものだった。要するに、煩悶するような連中は頭でっかちに陥っているので、まず健全な肉体を持たせよう、という考えのようである。勿論、「文学を禁止すべし」という過激な議論もある。

まず、第一のレベルから検討してみよう。煩悶の原因が当時の就職状況にある、つまり高等教育を受けたものの何もすることがないから煩悶する、という青年についてである。確かに、複数の寄稿者が、煩悶の原因として、学歴の価値の低下と就職口の不足に言及している。例えば、「社会は学問の価値に対し更に多くを払ふべし、今日、帝国大学の卒業者を、月俸二十五圓乃至三十五圓四十圓の薄給にて雇い入る、の實際は、学問の価値を蹂躪

すること余りに濫なる者なり。」という主張からは、当時は最早帝國大学を出ていても、必ずしも高給を得られなかつたことが見てとれる。また、「政府は大に殖民政策に重をおき年々増殖する人口特に青年子弟を海外に移して安全に生活せしむべし」「青年男子の海外に事業を求むることを益奨励すること」といった意見からは、失業者を殖民地に送り込むという帝國主義政策が望まれるほど、当時の青年が「余つて」いたことがわかる。石川啄木は明治四十三年に、

時代閉塞の現状は密にそれら個々の問題に止まらないのである。今日我々の父兄は、大体において一般學生の氣風が着實になつたと云つて喜んでゐる。しかも其着實とは単に今日の學生のすべてが其在學時代から奉職口の心配をしなければならなくなつたといふ事ではないか。さうしてさう着實になつてゐるに拘らず、毎年何百といふ官私大學卒業生が、其半分は職を得かねて下宿屋にころくしてゐるではないか。

と記しているが、この時期から既に「遊民」問題は顕在化してきていたのである。また、堺利彦は同誌に、

小生等の見る所に依れば、謂はゆる「青年男女の煩悶」の根本原因は、(彼等がそれを自覚せると否とに係はず)、獨立生活の困難 (即ち職業を得るの困難、及び父兄等に對する家族關係の困難)と、従つてそれより生ずる結婚の不自由とに在ると思ふ。

と述べ、社会主義運動への参加を促している。しかし、こうした社会主義運動は、それほど多くの青年たちの心を掴むことのないまま、弾圧されることになる。三宅雪嶺は、青年の関心が「国家」から「社会・個人」へ向いてきた、と論じていたが、青年たちの多くは社会ではなく、個人、というミニマムな単位に籠る、という道を辿るのである。

但し、これまで見てきたように、「煩悶」は藤村操という一人のスターによって伝播力は得たものの、それ以前から一部の知識階級の青年たちを捉えていた。藤村にしても、彼が自分の就職状況を憂えて煩悶にとりつかれたとは考えにくい。やはり、藤村のような一部のエリート青年たちが抱えていた煩悶は、煩悶「しか」することがないからするものではなく、もっと積極的な煩悶としてとらえられるべきだろう。そして、藤村の事件を契機に、独歩などが表明していた積極的な煩悶と、時代の閉塞状況下の消極的な煩悶が重なって、「煩悶流行」という大きなうねりをうみだしたのではないだろうか。

ところが、流行現象となることによって、変わってきたのが、「積極的煩悶」のありようだった。独歩が明治二十六年に「煩悶は心靈の鼓動也、良心の刺戟也、人間秘密の音楽也、人若し之を御すに健猛なる意志の力を以てし、精勵苦闘せば精神上一段の進歩を見ん」と友人の今井に書き送った時、そこには煩悶を経て、精神的に成長するのだという、前向きな意思の力が感じられた。藤村操の事件にしても、岩波茂雄は、昭和十年頃の回想に次のように記している。

今日優秀なる学生が左傾してその主義のために学問をすて、国法をおかしてまでも命がけで働くと同様に當時は天下国家を以て自ら任じ、乃公出でずんば蒼生をいかんせんと云ったような前時代の後を受けて自己を内親する煩悶時代とも云うべき時代であった。悠久なる天地にこの生をたくする意義を求めて苦しむ時代であった。伊藤左千夫のうたえる「さびしさの極みにたえて天地に寄する命をつくづくとおもう」というような気持を誰も彼も持っていたのである。藤村君はその勇敢なる先駆者であり、まじめなる犠牲者であった。³⁵

この文章が回想ならではの美化にとらわれたものだとしても、ここには天下国家を論じるレベルで煩悶する、という意気込みはある。ところが、だんだんと煩悶は薄つぺらなものになっていくようなのである。煩悶「しか」することのない不遇な青年たちの煩悶のことを、先ほど「消極的煩悶」と呼んだが、より恵まれた青年たちにお

いても、煩悶は自分の全知全霊を傾けた、積極性を持ったものではなくなっていく。流行の過程で、皆がしているから自分も煩悶「でも」するか、という、お手軽なものになっていくのである。これでは、そこに真剣味がなくなっていくのは当然のことでもある。山縣五十雄は「青年のうちに所謂煩悶をなす者あらば私は彼れが必ず怠け者なることを断言致す者に候」と言い切っている。

私も學生時代に所謂煩悶なるものを感じたる時有之候ひしが、今にして思へば其時代は私が最も多くの閑を有し、最も多く怠け得る時に候ひき、(中略)今の煩悶にかゝれる青年が殆ど皆良家の子弟の、何等の労働を為す必要な者のみなる事實を考ふれば、私のいふ所の虚ならざるを知るに足らん、

ここでは、煩悶は何も生むことのない、暇人の遊びのようなものとしてとらえられている。今や煩悶は、「个程(かはじ)までに女々しく拙き状態」とも形容されるようになっていのである。このような「煩悶」を身につけた青年は、文学作品の中に登場することになる。続いてそれをみていこう。

二 文学の中の煩悶青年たち

(一) ロシア經由の無為——文三から欽哉へ

それでは、明治の文学作品の中に、「煩悶青年」はどのような形で登場してくるのだろうか。

「煩悶青年」の原型は、明治二十年に第一編が発表された『浮雲』の内海文三、ともいえるだろう。野口武彦が指摘するように、『浮雲』は「岩麿性それ自体を正面に据えた」作品なのである。

さて、この小説において、文三の苦悩は、例えば次のように描写されている。

お勢母子の出向いた後、文三は漸く些して沈着、徒然と机の邊に蹲踞した儘、腕を拱み頸に埋めて懊惱たる物思ひに沈んだ。

これは、お政とお勢が本田と団子坂の菊見に出かけた後、お勢の気持ちを量りかねて文三があれこれと考える場面である。彼の「懊惱たる物思ひ」が恋愛問題であることは、また後に論じたいと思うが、ここでは、『浮雲』全編において、文三が殆ど家の中で苦悶しているだけである、という点に注目しておこう。免官になった後の文三は、ひたすら部屋に籠って悩んでいるのだ。中絶する前の第三編に至っても、彼はぐずぐずと考え続けている。

叔父に告げずして事を取めようと思へば、今一度お勢の袖を叩へて打附けに搔口説く外、他に仕方もないが、しかし、今の如くに、齟齬かうッてゐては言つたとて聴きもすまいし、また毛を吹いて疵を求めるやうではと思へば、かうと思ひ定めぬうちに、まず氣が畏縮けて、どうも其氣にもなれん。からまた思ひ詰めた心を解して、更に他にさまざまの手段を思ひ浮べ、いろ／＼に考へ散してみるが、一つとして行はれさうなもの見當らず、回り回ってまた旧の思案に戻つて苦しみ悶えるうちに、ふと又例の妄想が働きたして無益な事を思はせられる。

独歩が『罪と罰』の書評に「煩悶」という語を用いたように、明治の煩悶はまずロシア文学と結びついていた。「悩む青年」を主人公に据えた物語を初めて書いたのが、当時ロシア文学に最も精通していた二葉亭だったことは象徴的なことでもある。彼が『浮雲』を執筆するにあたってゴンチャロフの『断崖』を参考にしたことは、先行研究によって明らかにされているが、彼はロシア文学の中でオプローモフやライスキーのような「余計者」の青年像に触れ、それに触発された形で内海文三という主人公を造形したのである。

「余計者」とは、川端香男里が「まわりの社会と不適合になり、社会を拒みその社会から拒まれる人間という、

ロシア文学にしばしば登場するタイプをいう。才能を社会のために生かせず、人生に退屈し、行動しない人物である。」と定義するような人物像のことである。ゴンチャロフが一八五九年に発表した『オプローモフ』の主人公はまさにこのタイプで、「オプローモフ」はこうした「余計者」を指す普通名詞のように使われた時期もあったほどである。このような人物像がロシア文学に現われたことについて、木村彰一は「過酷な政治的弾圧の結果として、四〇年代は、どちらかといえば実践というよりはむしろロマン主義、理想主義といったようなものが青年の心をとらえていた時代である。四〇年代の知識人はいわば非行動的な言論の人であり、懐疑家であり、夢想家であったと言える。」とし、この時代の青年たちの空想的な傾向をあらわすものとして革命的民主主義者ゲルツェンの、「われわれの時代の特徴は、*Stübeln*（冥想）ということだ。われわれは完全な理解に達したうえでなければ、一歩も踏み出そうとしない。われわれはハムレットのようにたえず足をとめては考えてばかりいる。」といった言葉をひいている。

このような「余計者」的な人物像が、それまでの日本になかったかといえば、そういうわけでもない。唐木順三が『無用者の系譜』で考察したように、服部南郭らしい「無用之人」をもって任じた近世の文人儒者は夥しいのである。また、前田愛はこの研究を踏まえた上で、文雅と風流に通ずる途を拒否した独特の無用者意識の持ち主として寺門静軒を取り上げ、彼の無用者意識について「それは正確には余計者意識と呼ぶべきかも知れない。」と述べている。

さて、明治の余計者、文三は、官吏であるにも能力は必要なく、上司に諂うような「奴隷根性」が必要とされる社会というものに反発し、苦悶する。この小説について、後に島村抱月が「何だか是れまでに無い、自分等みずからの心中を穿つた小説だといふ感じ」を受けたと記すように、青年がひたすら苦悶する姿を綴ったこの作品は、日本文学において何か新しいことが始まった、という印象を周囲に与えたのである。

しかし、『浮雲』は中絶したこともあって、失職したままの文三がその後どうなるのかについては明らかにされてはいない。二葉亭自身は、このような文三に対してあまり深く思い入れることは出来なかったようである。こ

の点に関してもさまざまな研究が既に存在しているが、彼がこの問題に再び取り組んだのは、十九年後の『其面影』においてのこととなる。

それでは、「煩悶」という言葉を用い出した独歩の作品はどうなのだろう。のちに代表作『武蔵野』に収められることになる「忘れ得ぬ人々」は『國民の友』に明治三十一年に発表されたものであるが、ここには「生の孤立」というものが描かれていた。無名の文学者、大津（初出時には田宮）は次のように語っている。

『要するに僕は絶えず人生の問題に苦しむでゐながら又た自己將來の大望に壓せられて自分で苦しんでゐる不幸な男である。』⁴⁵

ここには「大望」を抱きながらも、うまくいかずに苦悶する青年の姿がある。この姿は、二年後の『萬朝報』懸賞小説人選作、「驟雨」になると、より八方塞がりの状況になっている。

渠^{かた}の行末を思へば心痛の至りに堪へず渠の特質は渠自身を呪ふが如く見ゆ渠には野心あり天才ありされど足なきの野心翼なきの天才なり進む能はず飛ぶ能はざるなり常に其心を喰ひつ、僅に其心の生命を繋ぎ居れり我儘にして高慢なり而て熱ある怠惰の慢性病に罹り居れり。其生涯は目的なきの生涯なり目的あるが如くにして實は一種の幻影を逐ふの生涯なり何事をか為さんと欲しつ、も遂に成就する能はざるの生涯なり。⁴⁶

これは、驟雨のために語り手と同宿することになった「肉瘦せ鼻高く年齢は二十四か五か」という青年の手記である。我々はここに文三の分身を見ることができよう。「足なきの野心翼なきの天才」とは、まさに文三のことをさしているのである。但し、独歩の作品では、「渠」は自分がそのような人間だということを白覚しているが、文三にはそこまでの自覚はない。文三がただひたすら苦悶し、その先に何があるのかは自分でも見えて

いないのに対して、「渠」の方は、絶望と共に白らの未来を予感している。独歩がトゥルゲーネフなどを好んで読み、「余計者」に学んだことは指摘されているが、この「渠」の告白は、トゥルゲーネフの「ルージン」における主人公の手紙の、節を思わせる。

そうです、たしかに私は天賦の才も貧しい方ではありません、が、恐らく私は、己れの力量にふさわしいことはなにも一つなせず、有益なる業績の一つも残すことなく世を終るであります。⁴⁷

一八五六年に発表された「ルージン」⁴⁸の主人公、ドミトリー・ニコライチ・ルージンも、「余計者」タイプの人物であった。独歩は、自らも苦悩する煩悶青年として、ルージンのような人物に共感したのであるか。トゥルゲーネフが、あくまでも客観的にルージンを造形し、作中に彼への批判も盛り込んでいるのに対し、独歩の作は、短編であることもあって、「渠」のような人物が社会に受け入れられないことが、哀感をもって記されているに過ぎない。ともあれ、独歩が描き出したのが、孤高でありながらも積極的な煩悶青年の姿であったことは、「浮雲」からの前進と考えることもできるだろう。

ところが、藤村操の事件によって俄かに「煩悶」がクローズアップされると、もともと大衆に開かれた新聞小説を舞台として、もう一つのロシア経由の「煩悶」作品が登場することとなった。それが小栗風葉の「青春」である。この小説は発表当時絶大な人気と高い評価を得たものだが、その後二流の風俗小説として顧みられなくなったものである。しかし当時の文学の流れの中に位置づける時、この作品には興味深い点がいくつか垣間見える。連載開始の前日の読売新聞には、「青春妙齡、花の如く火の如き情緒を抱いて、偏に荒涼たる社会の風霜を傷み、兼ねて近世思想の奔放なる潮流に漂ふ者、誰か内部の衝突と煩悶となからん。」と書き出したこの新連載の予告が出た。「煩悶青年」が主人公であることが、この小説の売り文句であったことは間違いない。文学作品の主人公として、「煩悶青年」はどのような道を辿るのであるか。具体的に作品に即して見ていきたい。

この作は、一編の新体詩の朗読から始まる。

……うつし世の

うつ、の歓楽今さめて、

あ、暁の夢に見し

常世の浄楽、憧る、かな。⁴⁹

この詩の作者が即ち主人公の帝大生、関欽哉というわけなのだが、彼は友人たちの絶賛に迎えられるのである。彼は自分の理想を滔々と述べる饒舌な青年である。

……自己主義、實際主義、肉慾主義、毛物けものの主義であるが、我々は然ういふものでは終に満足が出来ない、矛盾を絶した絶対的の快楽を希望する、圓滿な、不變な、理想的の神の世界を憧憬する。本能主義は反道徳であるが、我々は一歩進んで、道徳を超絶した美の境に入らうと云ふのです。⁵⁰

ここで彼が説いているのは、まさしく樗牛の「美的生活」の受け売りである。実は彼自身も自分の言っていることがよくわかっておらず、論旨は甚だ不明快なのだが、「比喩や、格言や、引例や、抽象的の熟語を手當り次第に振廻」すのが若者たちにはひどく深遠に聞こえるのである。先にひいた彼の新体詩には曲がつけられ、コンサートでも披露されて好評を博している。まさに憧れの新知識人、という体である。余談になるが、明治期には実際に、このような形で新体詩に曲がつけられ、コンサートで披露されていたらしい。明治二十七年に高山樗牛が弟に宛てた書簡には、上野の音楽会で山田美妙作の「秋風」という唱歌が披露され、樗牛がこれに感心したことが記されている。

さて、このような欽哉が、それでは新思想と新芸術を世間に広めるために日夜努力しているかというところではない。樗牛的なことをいってはいいても、欽哉は學問に邁進しようとしているわけでもないのである。「試験なんぞ行りませんな。」とうそぶく彼は、「全く學問という映景（かげ）に欺かれて居た」と「現代青年の煩悶」を説くに至る。

……天眞本性の發露、自然の性情の發揮と云ふ事は青年の生命ですからな。我々青年は一旦我なるものを意識した以上、其の自覺を飽くまでも眞卒に自由に發展爲やうと爲る。所が、社會だの教育だのは寄つて集つて其れを抑付けやう、遮理無理形式の内に押込まうと爲るから、さあ何うしても反抗せずには居られなくなる。一方では内部の自覺の疑問に責められるし、一方では然う云ふ外部の抑壓に闘はねば成らないし爲るから、其の精神上の苦悶と云ふものは實に慘憺たるものです！何しろ時代は此通り無趣味、無理想の惡時代であるし、自意識以外には、信仰も感化も慰藉も何にも無い全くの孤立で……能く何うも、生きてるのが寧ろ悲惨です！生活意志其物の深い懷疑と煩悶、煩悶の極が失望！厭世！厭世に次いで……あ、次いで来る運命は察せられるぢや有りませんか！

神經衰弱で入院している欽哉が、見舞いに來た人々に向かつて吐く台詞である。現実に苦惱して懷疑、煩悶↓失望↓厭世↓自殺と思考を続ける彼が藤村操の後継者であることは誰の眼にも見て取れるだろう。しかしながら、彼の饒舌な煩悶は独歩の描き出した孤高且つ貞摯な煩悶でもない。欽哉こそは、煩悶流行の申し子なのである。ところが、何もせずにただ苦悶する青年が、周囲からどのような扱いを受けるか、という点において、『浮雲』と『青春』では雲泥の差となっている。『浮雲』の文三は、免官になつてから、次第に誰にも相手にされなくなる。もともと彼に冷たかつたお政は無論のこと、彼がいくら悩んでも、お勢は要領よく出世を遂げつつある本田昇と親しくなつていく。ところが、『青春』においては、何もしない欽哉は周開の女性の人気者である。この二

人の扱われ方の差は、流行というものの恐ろしさを如実に物語っている。文三の無為は要領の悪さや偏屈さ、或いは怠け心として周囲に認識されるが、欽哉の場合には、高邁な理想のため、と逆にポジティブな評価が下される。その内実はどうであれ、煩悶が「新しいもの」「格好のよいもの」として世間に認知されるようになったという事実が、この作品からは読み取れるのである。

もう一つ、欽哉像を考える上で見落とすことができないのが、「青春」とトゥルゲーネフの『ルージン』との関係である。雄弁に実行の伴わないこの青年もまた、トゥルゲーネフの『ルージン』を下敷きにしたとされているのである。

この両者の影響関係については『青春』発表当時から、口やかましく騒がれた。ここにまず注目しよう。風葉も自ら「青春」に就いて先づ第一に申して置く事は、ツルゲーネフの「ルーヂン」です。⁵²」とその影響を認めており、二葉亭四迷が明治三十年に『太陽』に連載した『ルージン』の翻訳『浮草』にも「非常に感服し」、「『青春』の中にも『浮草』の中の文句を其儘流用した所さへある。」と告白している。

「自尊心とは——自殺ですよ。自尊心のある人間は、本立ちの、実もならぬ樹のように涸れ死んでゆきます、然しまた、自尊心とは、完成を渴望する活発な意欲に似て、すべて偉大なることの源泉であります……」と断言するルージンは、「煩悶青年」という主人公を求めていた風葉にとって格好のモデルとなったのだろう。また、風葉自身は欽哉を「不真面目な現代青年」ととらえており、その点において、独歩とは異なった立場に立っていた。トゥルゲーネフの作中のルージン批判は彼にとつて有用なものだったと思われる。欽哉の煩悶に関しても、

煩悶と云ふが、何有、那の男の煩悶は海上の波見たやうなもので、些つとした風にも激するが、心の底は極めて冷静なのだから……自我の強いと共に、自信……とも違ふ、白惚とでも云ふのか、物事を易く見て、上面をスーと撫で、通ると云ふ質で、人間が存外真面目で無い。⁵⁴

と脇役に言わせ、学生時代の友人と対比させるところなど、「ルージン」をそのまま参考に行っているといえるだろう。

さて、このように提出された『青春』の主人公関欽哉を、世間は「日本のルージン」と受け止めた。ルージンがその青春を過ごした一八四〇年代のロシアのインテリたちの姿は、そのまま明治三十年代の日本の若き知識人に当てはめられた。しかも、「日本のルージン」としての欽哉は、まさにポスト藤村にはもってこいではないか。江藤淳が『夏目漱石』の中で述べるように、「西欧風の『懷疑苦悶』を所有していることも名譽だつた」明治後期において、「欽哉＝ルージン」というこの図式は注目に値するだろう。中村光夫は『風俗小説論』で

日露戦後の「欧州の新思潮」の氾濫のなかで（中略）読者が何より望んだことは、その小説的手法はどうであつても、和服を着たルージンを、ラスコオリニコフをなまなましい手で触れられる人間として描きだしてもらふこと⁵⁰で、作者にもし舞台裏から彼等をあやつる余裕がなければ、作者自身が舞台に登つてもよかつたのです。

としているが、独歩の作品に比べても皮相な関欽哉という煩悶青年は、「煩悶流行」と「欧州新思潮」の氾濫の中で、「和服を着たルージン」と目され、時代の要望に答えたのだつた。志賀直哉のような若い世代には、『青春』を契機に「ルージン」を読みはじめた者も多かつたのである。そしてこの頃から、若者たちは自らの煩悶をそのまま仮託できる、苦悩する西洋文学の主人公を熱狂的に迎え、三宅雪嶺が述べたように、彼らとの「同化」を讚美する、不思議な時代が始まるのである。相馬御風が「懷疑と徹底」において、

さて顧みて、現下の吾々の苦悶的懷疑的生活を見ると、無論それは前に云つた如くファウストの形而上的哲學的懷疑ではない。矢張現實曝露から来るハムレットの懷疑、ジヨルヂオの懷疑である。而して同時にバザ

ロフ——虚無主義に突進する以前のバザロフの懐疑である。⁵⁷

と語っていることも、人々がこの文脈で西洋文学を摂取しようとしていたことを意味している。そして、「白分たちはハムレットであり、ダンヌンツィオの『死の勝利』のジョルジョであり、トゥルゲーネフの『父と子』のバザロフである」というような同一化幻想の先駆けとして、関欽哉は無為であるという、日本のエリート男性にあるまじき点を正当化され、続く多くの煩悶青年を文学の中に生み出すことになったのである。

(二) 煩悶できる身分

さて、関欽哉がともかくも「日本のルージン」として明治日本に登場するについて、どうしても彼は日本の状況に適応しなければならなかった。この先、「日本の煩悶青年」が抱えなければならない問題というものを、『青春』は内包していくことになる。

まず第一に問題になるのは、彼の身分である。ルージンのようにパトロンに庇護されて生きていくということ想定出来ない明治日本において、欽哉は大学生として登場した。藤村の自殺が「学生というモラトリアム状況下の死」であったことを重要視したのは磯田光一であるが、彼が指摘する通り、煩悶は学生という猶予期間と密接に結びついたものだった。そもそも学生時代は立身出世に向けての準備期間であり、良い学校を良い成績で卒業することが、薔薇色の未来を約束する切符だったはずなのだが、学生たちは、藤村を経て、もうそこには興味を見出せなくなっていた。そしてヨーロッパの思想や文学を吸収して「煩悶」にふけることそれ自体が、学生の新たな特権として浮かび上がる。インテリゲンツィアだからこそ煩悶するんだ、という気概の裏には、「煩悶」で「きる」という特権意識が潜むことになるのである。『青春』において、高校生、大学生の煩悶は、「好んで懐疑に煩悶する、煩悶しても徹底為やうと云ふ念は無い、疑惑を抱いて、其れを研究して何處までも解釋為やうとはせず、却つて煩悶其物に耽溺して居」るものだという欽哉の古い友人北小路の言葉は、学生という身分の持つ限

られた時間における特権性というものを見越した発言であるようにも思える。そして、ここで学資を誰が出しているかということをも考えあわせると、そこには皮肉な関係が見えるだろう。

東京出身者とはかく、当時の地方の青年が東京で高等教育を受けようとする場合、彼らは学費の他に下宿代を負担しなければならなかった。地方の素封家の子弟にとつてはその位の出費はどうということもないが、そうでない場合、この問題は彼らの肩に重くのしかかることになる。その一つの解決法は、奨学金を得る、というものであった。『浮雲』の文三は静岡出身だが、父亡き後、十五才で東京の叔父のもとに引き取られている。彼が高等教育を受けることができたのは、とある学校の給費の試験に合格したからだ。『三固より餘所外のおほまちやま方とは違ひ、親から仕送りなど、いふ洒落はないから、無駄遣ひとは一銭もならず、また為ようともしはずして、唯、心に、便のない一人の母親の心を安めなばならぬ、世話になつた叔父へも報恩をせねばならぬと思ふ心より、寸陰を惜んでの刻苦勉強に學業の進みも著るしく、何時の試験にも一番と言つて二番とは下らぬほどゆゑ、得難い書生と教員も感心する。』と本文中には表現されているが、奨学金を貰いながら勉学を続けた彼は、無論煩悶などにふける余裕はなかつたことになる。もう一つの方法は、後見人を得る、というものだった。一口に「後見人」とはいつても、様々なパターンが存在するのだが、大雑把にいつてしまえば、青年の優秀さを見込んだ東京の財産家が、学資を負担する、というものである。『青春』の前に読売の新聞小説で大当たりを叩いた小杉大外の『魔風戀風』では、大学の法科へ通う東吾は養家に学費を出して貰い、ゆくゆくは家の娘と結婚する、という段取りになっている。『青春』の場合には、欽哉は親元から仕送りをしてもらっているが、亡父の同僚の実業家が東京における後見人のような形である。そして、いずれの場合においても、学資を負担する親や後見人は、若者が将来その学歴をもって立身出世することを望んでいる。『青春』では、後見人の香浦は欽哉の母との会話の中で、「医者の方を勧めたのは惜かつた」「折角学上になつて中学の教師ぐらゐで果てるのは誠に充らん」と欽哉の出世について懸念する。一方の母は、「中學でも小學でも、私は最う大きい慾も息子にや御座んせん。」「最う今ぢや諦めとります。」と諦めの境地にあることを口にする。とはいふものの、ここにおける欽哉と

その後見人、或いは田舎の家族との関係は、自立していない限り葬り去られざるを得ない「煩悶学生」というものの脆さをさらけ出している。

では、学生でなくても煩悶できる身分は何か——それは財産家であった。この点を指摘しているのは夏日漱石である。作品の中に漢語をよく用いた漱石は、『吾輩は猫である』以降何度か「煩悶」という語を使っているが、明治三十九年の作品『野分』においては、当時の流行現象としての「煩悶」を早速取り上げている。『野分』は漱石の作品の中では評価の低いものだが、石崎等も指摘したように、漱石が如何に時代を見るに敏な人物だったかという点を『野分』は十分に示している。

「僕だつて三年も大學に居て多少の哲學書や文學書を読んでるぢやないか。かう見えても世の中が、どれ程悲觀すべきものであるか位は知つてる積だ」

「書物の上でだらう」と高柳君は高い山から谷底を見下ろした様に云ふ。

「書物の上——書物の上では無論だが、實際だつて、是で中々苦痛もあり煩悶もあるんだよ」

「だつて、生活には困らないし、時間は充分あるし、勉強はしたい丈出来るし、述作は思ふ通りにやれるし。僕に較べると君は實に幸福だ」⁶¹

この作品は、東京で超然と貧乏生活を送る文学者白井道也に、作家志望の貧乏学士高柳と、その大學時代の友人で今は新進の青年文学者となつてゐる金持ちの中野輝一をからめたものである。今挙げた高柳と中野の会話には、生活するために翻訳をして思索する時間もない高柳と、相変わらず煩悶していると公言する中野の姿が描かれる。モラトリアムたる学生でなくなつてしまつた二人の描写を通して、漱石は、なおもこの「煩悶」にひたつていられるのが中野という財産家だけであることを指摘しているのである。漱石は、明治三十九年十一月十七日付けの松根豊次郎宛の書簡で、「今日森田白楊の所へ行つて西洋料理を御馳走して帰り道に彼の身の上話⁶²」をき

いた所が風葉の青春よりも余程面白かつた。」と記している。明治三十八年から門下生との交流が深まった漱石にとつて、『青春』の世界と弟子たちの世界は重なるものと見えたのであろう。そして彼は「野分」以降、青年を主人公とする作品を書き続けて、『青春』に内包された問題を自らの手で再構築していくことになる。⁵⁴

ここでもう一つ付け加えて置くならば、学生と財産家にしか許されなかつた煩悶を、公然と続けられる職業を提示したのが、田山花袋の『蒲団』だつたのではないだろうか。風葉が「和服を着たルーゼン」を舞台裏から操るうとして綻びを見せてしまったのだとすれば、ハウプトマンの「寂しき人々」を読んで「ヨハンネスは私だ。」と自ら舞台上上がった『蒲団』の成功と、続く「私小説」の確立は、小説家が「全能の神」たることをやめ、舞台の上で自分の苦悶を告白するだけでよいのだという認識をも生み出したのではないだろうか。『蒲団』という小説において、主人公の竹中は、「煩悶又煩悶、懊惱また懊惱」というように、むやみやたらと煩悶している。また、近松秋江の『別れたる妻に送る手紙』にもこんなくだりがある。

——自分は何うも夢を眞実と思ひ込む性癖がある。それをお雪は屢々言つて、「貴下は空想家だ。小栗風葉の書いた欽哉にそっくりだ」と、戯談ふやうに「欽哉欽哉」と言つては、「そんな日算も無いことばかり考へてゐないで、もつと手近なことをサツ／＼と為さいな！」とたしなめ／＼した。⁵⁵

ここでは、作中「雪圃」という名で登場する語り手が自分のもとを去つた妻のことを回想している。そしてこの語り手も、「読み書きをするのが何うでも自分の職業」なのである。ここで「欽哉」と呼ばれる語り手は、何も為し得なかつた本物の関欽哉の可能性をも示唆しているように思えるのである。明治四十三年の『東京パック』には、「学生」の進歩十ヶ年」と題された、『図一』のような作者不詳の風刺図絵が掲載された。ここには、当初「勉学」に励むものの、良からぬ書物（恐らく西洋文学）を「耽読」となる、まさに欽哉のような学生の姿が描かれる。そして、退学になつた後の彼は、「耽溺」の次に「実写」を試みている。こうして自ら

の煩悶や耽溺を種に文筆で身を立てることができれば、彼は文学者として認知され、社会的な地位も保証される。しかし、そこでうまくいかなければ、待っているのは「華厳」なのである。

(三)「戀」という煩悶

最後に、「戀」と「煩悶」の関係について考えたい。

恋愛は剛腹な青木を泣かせたほどの微妙な音楽であった。この世に属した物と言へば、名でも、富でも、栄花でも、一切希望を置かないと言ったやうな、一徹無垢な量見から、実世界の現象ごとごとく仮偽であるとまで観じたほどの少壮な青木ではあったが、ただ一つ彼の眼中に仮偽でない見える物は恋愛であった。彼のやうに恋愛の思想を重んじ、またそれをばからず発表したものも少なからう。彼に言わせると、恋愛は人世の秘鑰である、恋愛あつて後に人世がある、恋愛を抽き去つた日には人生何の色も味もない……⁶⁷

と島崎藤村の『春』にも描き出されたやうに、煩悶の先駆者であった北村透谷や国木田独歩も「恋愛」に多大なるエネルギーを注いだ。高山樗牛も「美的生活を論ず」の中で「恋愛は美的生活の最も美はしきものの一手。是の憂患に充てる人生に於て、相愛し相慕へる年少男女が、薔薇花かをる籬の蔭、月の光あかき磯のほとりに、手を携へて互に戀情を語り合ふ時、其の樂みや如何ならむ。」と述べている。これを実践したのが独歩で、彼は、『欺かざるの記』において白らの「恋愛」を克明に記録した。明治二十八年八月一日に「われ等は戀愛のうちに陥りぬ。」と宣言した彼は、西洋の小説そのままに、「戀愛の極に達し」た二人がキスを交わす場面をも次のやうに描き出している。

而して相抱きて接吻せり。嬢は再び小児の如くになりぬ。たゞうつらくと戀の香に醒ふて殆ど正体なからん

とす。接吻又た接吻。吾等は悲哀の感に打たれ、又歡喜の笑をもらしぬ。

ところが、その「煩悶」と「恋愛」の先駆者であったところのその独歩が、明治三十九年には青年に対してひどく批判的なのである。「現代の青年は、私共の時代のそれと比較すると、體育の點が大に発達し」ているが、それに反して、「何となれば、渠等の精神は身體の發育に反比例して、懦弱優柔一だ、と彼は評する。そして、その根拠として、

今日の青年が私共の時代と比較して如何にも浮薄なることは、彼等が寄ると觸はると、直に戀愛談で持ち切るのを見ても分る。

と述べるのである。つまり、恋愛談義を独歩は「浮薄」なもの、ととらえているわけである。それでは、「煩悶」についてはどうなのかといえ、その翌年、彼は「新古文林」に寄せた文章の中で、自らの煩悶を哲学や宗教、或いは文芸と結び付け、「たゞ自分は、人生問題に煩悶した當時の我から全く離れて、たゞ文藝の爲めに文藝に埋れ度くありません」「人生の研究の結果の報告」といふ覚悟は何處までも持て居たいのです。」と記している。この時点で独歩は自らの「煩悶」を若き日のものとしながらも、否定的にとらえているわけではなく、むしろポジティブな意義を与えているのである。つまり、独歩にとっては、いつまでも「煩悶」は一生の大問題なのであり、浮薄な恋愛とは全く別の次元のものである。

しかし、独歩の気概とは裏腹に、煩悶は流行現象となっていく中で、「恋愛」に結び付けられつつあった。「厭世と煩悶の救済策」を問われた棚橋純子は、

青年男女の厭世煩悶平たく云へば戀愛の二字に外ならずと存じ候、名を煩悶とか厭世とかいふに借りて表面

を飾る手段と察せられ候。⁷²

と述べているが、『青春』でとうとう学校も出ず、職にも就くことのなかった欽哉が唯一したことゝ恋であった。漱石の『野分』を見てみよう。

「一体煩悶といふ言葉は近頃大分はやる様だが、大抵は当座のもので、所謂三日坊主のものが多し。そんな種類の煩悶は世の中が始まってから、世の中がなくなる迄続くので、ちつとも問題にはならないでせう」

「然し多くの青年が一度は必ず陥る、又陥る可く自然から要求せられて居る深刻な煩悶が一つある。……」

「夫は何だと云ふと——戀である……」⁷³

前述の引用は中野の所へ「現代青年の煩悶に対する解決」についてインタビューに来た雑誌の記者としての白井道也に、大真面目に中野が答えるくだりである。漱石は、『草枕』において既に「世には有りもせぬ失恋を製造して、自から強いて煩悶して、愉快を貪ほるものがある。」⁷⁴と記しているが、ここでも、「煩悶＝戀」と断言してはばからない日本の煩悶青年たちの現状を鋭く切り取っているのである。

また、藤村操の死も、「恋愛」に無縁ではなかった。彼の自殺の原因が本当は失恋であった、という説は、彼の死の直後から囁かれ続けてきたのである。事件当時、さまざまな報道の中でも藤村を「失恋奴」と糾弾したのは、宮武外骨の『滑稽新聞』だったが、外骨は、藤村の死に共感した涙香を、扇動者として「死せよ」と書き、「巖頭の感」のパロディーも発表している。

婢々たる哉阿嬢、娟々たる哉松子、墮落の青生を以て此女をはからむとす。ホレーターの色学竟に何等のオイロチイーを得るものぞ。野郎の戀想は唯一言にして悉す、曰く「不乃恋」。我この恨を懷て煩悶終に死

を決定するに至る。既に巖頭に立つに先つて胸中衝気の外あるなし。始めて知る大なる虚名は大なる元名に一致するを。⁵⁹

ここまでひどくはないにせよ、木下尚江は『火の柱』の中で藤村の自殺の原因は失恋だったとしているし、蘇峰の『大正青年と帝国の前途』でも、「煩悶青年」の項に「失恋したるがために、滝壺に陥りて自殺したる徒」⁷⁶とある。なお、この問題は現代にまで続いているようで、昭和六十一年には、藤村の自殺の原因が失恋だったという「証拠」が出てきた、との新聞報道もなされている。

藤村操の自殺の真相はともかく、外骨や蘇峰の立場では、「煩悶青年」などというものはことほど左様にくだらないことに憂き身をやつす存在であった。しかし、批判されているはずの当の青年たちは、独歩の観察にもあるように、恋と煩悶を結びつけ、それを恥じる風でもない。むしろ、神話となった藤村操の死の原因が「恋」だったのだ、という認識は、独歩や榜牛といった煩悶青年が「恋愛」を讃美したこととあいまって、恋こそが煩悶なのだ、という定義を補強することになったのかも知れない。大町桂月は明治四十年に『青年と煩悶』という本を出版し、本能主義、職業選択の衝突、病弱、など実に二十七項目に及ぶ当時の青年の煩悶の原因とその解決策について問答形式で述べているが、その中で二番目に挙げられ、多くのページが割かれているのは、「失恋」だった。この項に登場する青年は、将来を約束した幼馴染の女性が親の決めた相手と結婚するにあたり、「白刃を加へて、我もともにとも思つて見たり、又思ひかへして、いつそ我身が華嚴の瀧へでもと思つて見たり、この夏は、国へかへるもいやになりて、かへらず、今になほ煩悶に堪へず」と訴える。対して桂月はこの青年が「今の世の戀愛文學、西洋一派の思潮にかぶれて」いることを見抜くのだが、彼の言うように、当時の青年の中でも、西洋文學に傾倒する煩悶青年たちにおいて、「恋」という煩悶は肥大していくのである。

- (1) 『近代日本思想大系』第八卷、築摩書房、一九七八年、七四頁
- (2) 『定本国木田独歩全集』第六卷、学習研究社、昭和三十九年、六四頁
- (3) 同右、六五頁
- (4) 同右
- (5) 『定本国木田独歩全集』第一卷、昭和四十年、二二三頁
- (6) 『世界文学全集』第二卷、中村白葉訳『罪と罰』月報、新潮社、昭和三年
- (7) 『改訂註釈樗牛全集』第六卷、博文館、昭和六年、二四二頁
- (8) 未発表のものとしては、前年のユーゴーの「流砂」を挙げるができる。
- (9) 『改訂註釈樗牛全集』第三卷、大正十五年、七五頁
- (10) 『定本国木田独歩全集』第一卷、二三頁
- (11) 『島崎藤村全集』第一卷、築摩書房、昭和四十一年、五二六頁
- (12) 後藤宙外は、『新小説』九月号で、「近來の新聞雑誌を通じて、最も喧囂を極めたる問題は何ぞ。満韓事件以外に於ては、確に彼の華嚴瀑の懷疑自殺者藤村操子の上に係るものに及くはなからむ。」と述べている。
- (13) 藤村の自殺の本当の原因は失恋であったとするのが今日に至るまでの通説ともなっているようだが、その点については第二節で扱う。また、山名正太郎によれば、昭和の初めに日光の町役場で発見され、その後紛失した台帳の変死欄には、冒頭に藤村操の名があり、「原因、哲学研究のため」とあったという。
- (14) 魚住折蘆「藤村操君の死を悼みて」『新人』明治三十六年七月号、『明治文学全集』第五〇卷、築摩書房、二八七頁
- (15) 黒岩涙香「藤村操の死について」『明治文学全集』第四七卷、三七四頁
- (16) Minois, Georges: *Histoire du Suicide: La société occidentale face à la mort volontaire*, Fayard, 1995, pp.315-316
- (17) 明治三十六年七月四日の『東京日日新聞』には、早くも「藤村の卒をまね、華嚴の滝入水が流行」の見出しがあらわれる。
- (18) 藤村に影響されたと思われる青年の自殺の増加には、当局は手を焼いたようである。明治四十年五月二十八日の『読売新聞』は、『煩悶記』が「安寧秩序紊乱の廉にて発売禁止を命ぜられた」ことを伝えている。
- (19) 自らもシェークスピアの「ヴィーナスとアドニス」を明治二十五年に『女学雑誌』に訳載した島崎藤村は、「春」の中で「イギリスの詩歌——ことにシェークスピアの戯曲は青年の間に読まれた。よく連中の話にも上る。」(四)

- と記し、透谷をモデルとした青木に「ハムレットは最も悲しい夢を見た人間の一人である。」と評されている。
- (20) 伊藤整『日本文壇史』第七卷、講談社、昭和三十九年、一四五頁より転載。なお、藤村の自殺とその周辺に関しては、平岩昭三「藤村操の華嚴の滝投身自殺事件をめぐって」(『日本大学芸術学部紀要』第十九号、一九八九年、二四〇―四四頁)に詳しい調査論考があり、こちらもあわせて参考とした。
- (21) 三宅雪嶺「慷慨衰へて煩悶興る」(『想痕』所収)『明治文学全集』第三三卷、三五〇頁
- (22) 三宅雪嶺「一は決意奮闘一は懷疑頹廢」(『想痕』所収) 同右、三四二頁
- (23) 『島崎藤村全集』第十卷、昭和五十六年、三二五頁
- (24) 長谷川天溪「人生問題の研究と自殺」『太陽』明治三十六年八月号、一七四頁
- (25) 大塚保治「死と美意識」『太陽』明治三十六年九月号、五五頁
- (26) 『漱石全集』第十四卷、岩波書店、一九九五年、一七九頁
- (27) 伊藤整『日本文壇史』第七卷、講談社、昭和三十九年、一四六頁
- (28) 『平民新聞』明治三十七年五月八日
- (29) 松岡秀雄「藤村探」『日本人の百年』第八卷、世界文化社、一九七二年、九四頁
- (30) 例えば、D・H・キンモンス『立身出世の社会史』広田照幸、加藤潤他訳、玉川大学出版部、一九九五年、が挙げられる。
- (31) 丘浅次郎「世間一般に知らぬ顔すべし」『新公論』明治三十九年七月号、一五頁
- (32) 田口大吉郎「学問の価値を余り高く見積り過ぐ」同右、一〇頁
- (33) 石川啄木「時代閉塞の現状」『啄木全集』第十卷、岩波書店、昭和三十六年、三〇頁
- (34) 堺利彦「自由安楽の新社会を建てよ」『新公論』明治三十九年七月号、一七頁
- (35) 岩波茂雄「回想二題」『茂雄遺文抄』日本図書センター、一九九八年、五二頁
- (36) 山縣五十雄「煩悶は一種の養沢なり」『新公論』明治三十九年七月号、一五頁
- (37) 本多庸一「功名心を大にして精神的趣味を深からしむべし」同右八月号、五頁
- (38) 『二葉亭四迷全集』第一卷、岩波書店、一九六四年、六八―九頁
- (39) 同右、一四九頁
- (40) 十川信介『二葉亭四迷論』築摩書房、昭和四六年、一〇〇頁
- (41) 川端香男里編『ロシア文学史』一九八六、東京大学出版会、一六七頁
- (42) 木村彰一「ロシア文学における世代の問題——トゥルゲーネフの『父と子』とドストエフスキイの『悪霊』——」

- (43) 『魅せられた旅人——ロシア文学の愉しみ』恒文社、一九八七年、一五七頁
- (44) 前田愛一・幕末・維新期の文学』『前田愛著作集』第一卷、築摩書房、一九八九年、一〇〇頁
- (45) 坪内逍遙、内田魯庵編『二葉亭四迷』(明治四十二年刊)、『二葉亭四迷全集』第一卷、四一〇頁
- (46) 『定本 国木田独歩全集』第二卷、一一〇頁
- (47) 同右、二二〇頁
- (48) トウルゲーネフ作、中村融訳『ルージン』岩波文庫、一九六一年、一六一頁
- (49) この作品は二葉亭によって『浮草』という題で翻訳されている。また、『ルージン』の影響を受けた日本の文学の早い例としては、明治二十二年八月に『国民の友』に発表された矢崎鎮四郎の『流転』があげられる。
- (50) 小栗風葉『青春』(上)、岩波文庫、一九五三年、五頁
- (51) 同右、九〜十頁
- (52) 同右、四五〜四六頁
- (53) 小栗風葉『青春』物語』『文章世界』二卷一号、明治四十年一月十五日
- (54) 『ルージン』、四九頁
- (55) 小栗風葉『青春』(中)、岩波文庫、一九五三年、一五六頁
- (56) 中村光夫『風俗小説論』(昭和二十五年)『中村光夫全集』第七卷、築摩書房、昭和四十七年、五五〇頁
- (57) 明治四十年代の(文芸と人生)論議においても、青年たちが同様に「芸術と実生活をびつたり一つに行かうと」していたことを指摘しているのは日比嘉高である(日比嘉高「文芸と人生」論議と青年層の動向』『日本近代文学』第六十五集、日本近代文学会、二〇〇一年十月、一五〇〜一六二頁)
- (58) 相馬御風「懷疑と徹底」明治四十三年『文章世界』、『明治文学全集』第四三卷、三一九頁
- (59) 磯田光一「遊民」的知識人の水脈——屈折点としての藤村操——『近代の感情革命——作家論集』、新潮社、一九八七年、二六頁
- (60) 『二葉亭四迷全集』第一卷、一一二頁
- (61) 石崎等『漱石と「新しい世代」覚書——『野分』前後——』平岡敏夫編『日本文学研究大成 夏目漱石』国書刊行会、一九八九年、八一〜九〇頁
- (62) 『漱石全集』第三卷、六五二頁
- 恐らくこの折に草平が話した身の上話というのが、後に『煤煙』の始めの部分で述べられることになる自分の出生の秘密のようなものである。

- (63) 『漱石全集』第十四卷、五〇九頁
- (64) 磯田光一は前述の論文の中で、『三四郎』から『それから』の道程のうちには、おそらく風葉の『青春』が微妙にはたらいいていると思われる。」とし、『青春』の関欽哉のこの不決断は、時代の空虚を体現している点において、『それから』の代助の不決断の先駆とみられるであろう。」と述べている。
- (65) 『定本花袋全集』第一卷、昭和十一年、平成五年（復刻版）、臨川書店、五九五頁
- (66) 『近松秋江全集』第一卷、八木書店、一九九二年、一四頁
- (67) 島崎藤村『春』、『島崎藤村全集』第三卷、築摩書房、一九八一年、五六頁
- (68) 高山樗牛『美的生活を論ず』（明治三十四年八月）、『改訂註釈樗牛全集』第四卷、博文館、昭和二年、七七三―七七四頁
- (69) 『定本国木田独歩全集』第七卷、学習研究社、昭和四十年、三四五頁
- (70) 「當代の青年は何故に精神的方面に於て繊弱なる乎」『定本国木田独歩全集』第一卷、四九二頁
- (71) 「我は如何にして小説家となりしか」『定本国木田独歩全集』第一卷、四九八頁
- (72) 棚橋絢子「平たく云へば戀愛の二字に外ならずと存じ候」『新公論』明治三十九年七月号、〇頁
- (73) 『漱石全集』第二卷、六六八頁
- (74) 『漱石全集』第三卷、三三三頁
- (75) 『滑稽新聞』第五三号（明治三十六年七月）、吉野孝雄監修『宮武外骨此中にあり』第八卷、ゆまに書房、一九九三年、四〇七頁
- (76) 『徳富蘇峰集』七五頁
- (77) 『朝日新聞』昭和六年七月、日夕刊
- (78) 大町桂月『青年と煩悶』参文舎、明治四十年、九頁

6年



失戀

1年



學校

7年



耽溺

2年



勉學

8年



實寫

3年



耽讀

9年



失意

4年



實行

10年



華嚴

5年



退學

【図1】